

・『ビルマの豎琴』

水島上等兵は、戦後小説の古典的名著『ビルマの豎琴』の主人公である。

『ビルマの豎琴』のあらすじはおよそつぎのようなものである。

ビルマ戦線を敗走していた水島の属する日本軍の一部隊は、村に寄宿中に英印軍に包囲されるが、「埴生の宿」を合唱したところ、敵側から「スイート・ホーム」の合唱が返ってきて、停戦を悟り、武装解除する。その後、捕虜収容所に収容されていたとき、部隊長が停戦を知らずに山に籠城する別部隊救出のための伝令として、水島に白羽の矢を立てる。しかし、水島は帰還することなく、隊員たちが安否を気にかけていたところ、日本に引揚げる前日になり、ビルマ僧に扮した水島が姿を現し、隊員の歌う「埴生の宿」に豎琴で応えるも、「仰げば尊し」をかき鳴らして無言のまま姿を消してしまう。その後、引揚船のなかで、隊長は水島から託された手紙を隊員たちに読み聞かせ、そこで初めて隊員たちは、水島が救出に向かった部隊が玉砕した後、ビルマ僧に化し帰隊を目指す途上で出くわした日本兵の酸鼻をきわめる累々たる戦死体に啞然とし、ビルマに残留し、戦死者たちの遺骨収集のために身を捧げることを決意したとの真相を知る。(竹山道雄『ビルマの豎琴』)

『ビルマの豎琴』は、一九四七年から童話雑誌に掲載されたものを、翌年に中央公論社が単行本化したものである。一九四八年には毎日出版文化賞、一九五一年には文部大臣賞を受賞し、多くの出版社が刊行する各種文学全集や児童文学全集、文庫のなかに収録される定番作品となった。そればかりか、一九五六年と一九八五年には市川崑監督によって映画化され、ヴェネツィア国際映画祭サン・ジョルジオ賞を受賞、アカデミー外国語映画賞にノミネートされるなど、海外でも高い評価を受けた。

しかし、水島上等兵は架空の人物であり、**著者の竹山道雄自身も、徴兵されず戦場体験は皆無**であった。馬場公彦『『ビルマの豎琴』をめぐる戦後史』によれば、そもそもこの小説は、はじめは中国を舞台に日本と中国の敵兵同士の和解の物語として構想されていた。しかし、日本と中国では共通の歌がないため、日本人が昔から慣れ親しんだ歌を持つイギリスが敵に選ばれ、その結果として日英の激戦地であったビルマが舞台に選ばれたにすぎない。そのため、『ビルマの豎琴』が反戦平和、鎮魂、和解、近代文明批判を掲げた作品として称賛を受ける一方で、ビルマ自体はこれらのテーマの背景でしかなく、近代文明の病を癒やすための道具として利用され、戦争の被害者であったはずのビルマ人がその当事者として扱われることはけっしてなかった。

言うなれば、『ビルマの豎琴』とは、日英和解を主題とする、アジア不在の物語だったのである。

・横井庄一

横井庄一の決意

これに対して、横井庄一、小野田寛郎は実在の人物である。二人については、これまでその超人的なジャングルでの生活ばかりが言及され、その生い立ちや戦争に動員された経緯、あるいは現地の住民との関係などについては等閑に付されてきた。まずは、それぞれの残留日本兵の個人史を、その生い立ちに遡って見ていこう。

横井庄一（一九一五年、愛知県生まれ）は、母子家庭で育った。幼い頃からそのことをからかわれ、いつか周囲を見返してやろうと思うようになった。高等小学校を卒業後、一年間速算学校に通い、豊橋の軍服を専門に扱う花井洋服店に丁稚奉公に出た。二〇歳のときに徴兵検査を受けたが、第一乙種合格であったため、現役入隊を免れている。三年後に独立して、名古屋の師団を顧客に洋服屋を始めた。しかし一九三八年、臨時召集令状の赤紙を受け取り、名古屋の輜重（しちょう）兵三連隊補充隊に配属され、その後、野戦重砲兵第一旅団輜重隊第二中隊へ補充されて中国の広東に駐屯することになった。このときは勝ち戦が続いていたため、何事もなく、召集解除を受けて内地に戻った。

その後、一般の洋服屋に転業したが、事業が軌道に乗りにかけた一九四一年に再び召集される。今度は満洲の奉天省遼陽の輜重兵第二九連隊に配属され、付近の警備についた。一九四四年三月、南方行きを命じられ、釜山港からグアム島に向かう。グアムでは第三八連隊に配属された。美しい島にみとれながら、椰子の木以外何もない浜辺の警備についていたが、翌月二万人を超える兵隊が島に配置され、防御陣地の構築に専念した。

六月に米軍がサイパン島に上陸すると、空襲は激しさを増し、この間ひどい下痢に悩まさ

れ続けた。七月には米艦隊の集中砲火を受ける。横井は、壕の中で、負け戦とは情けないものだと感じた。

そして米軍上陸。横井は一時退却命令を受け、ジャングルに入った。米軍は上陸三日にして一三〇〇トンの爆弾を投下し、南海の樂園といわれた島を一変させた。第三八連隊は最初一日だけで九割近い戦死者と行方不明者を出した。横井も夜襲を仕掛けたが効果なく、司令部との連絡も絶たれ、ジャングルで孤立してしまう。日中は身を隠し、夜に雨露に耐えながら負傷者を抱えてジャングルのなかを迂回しながら敗走した。島の日本軍は総攻撃の後に敗北し、軍司令官が自決して島は米軍の手に落ちた。

しかしそんなことなど知る由もなく、横井は中隊長から、小隊を率いてゲリラ作戦を持続完遂せよと言われ渡される。これを聞き、横井は「こんなところでくたばってたまるか」と思い、タロホホ川の河口にある折り畳み式のボートを使い島から脱出する計画を立てるが、米兵に見つかり、断念。ジャングルに戻り、三〇人からなる小隊を解散して三つの小グループに分け、自らは四人の部下を率いてジャングルに潜伏し、仮小屋暮らしをはじめた。

輜重（しちょう）

軍隊の糧食・被服・武器・弾薬など、輸送すべき軍需品の総称。

洞穴からの帰還

その後、六人が加わり、一人一人所帯となったが、巡察隊によって三人が死亡し、一人が脱落した。しかしこの段階でも、横井たちは日本が降伏したとは夢にも思わず、必ず友軍が逆上陸してくると信じていた。そのため、山の手からスピーカーで投降勧告を呼びかけられたときもまったく意に介さなかった。

一九四六年に入っても、米軍の激しい敗残兵狩りに怯えながら、行くあてのない逃避行を続けた。その後、他の仲間と離れ、気づけば衛生兵の志知幹夫と海軍軍属の中島悟の三人だけになっていた。それも一九四八年の暮れ以降は、食糧をめぐる言い争いから、横井は二人とつかず離れずを繰り返した。そして、島のチャモロ人兵士の討伐に悩まされながら、仮小屋を作っては逃げ回った。しかし、それにも限度があり、地下に潜るしか生きる道はないと考えた横井ら三人は、一九五〇年以降、洞穴づくりに着手し、試行錯誤の末に一九五九年に本格的な洞穴を完成させる。

一九六三年、三人はいかだで島から脱出を図るも、すでに島は開発が進み、誰にも見つからずに脱出することなどできなかった。その年の夏に大型台風が通過すると、食糧が手に入らず、生活は過酷を極め、翌年、志知と中島が栄養失調で死亡した。

以後八年間にわたり横井は一人でジャングルでの洞穴生活を続け、胃潰瘍と栄養失調に苦しめられた。一人になってからはあまり動かずに過ごした。とにかく日常の生活が大変であったことから、性欲や望郷の念も不思議と湧かなかったという。一九七二年、島のチャモロ人に発見された横井は、日本に帰国する。帰国時に発した第一声をとらえた「恥ずかしながら帰って参りました」はその年の流行語に選ばれ、同年に日本人女性と結婚。一九七四年には、参議院議員選挙全国区に立候補したが落選している。その後も、耐乏生活評論家として活躍する一方、子供の頃の遊び仲間であった陶芸家の鈴木青々との出会いが縁となり、自宅に窯をこしらえ、陶芸に没頭したが、パーキンソン病を患い、一九九七年に死去した。（横井庄一『明日への道』、横井美保子『鎮魂の旅路』）

・小野田寛郎

小野田寛郎の特殊任務

小野田寛郎（一九二二年和歌山県生まれ）は、旧制中学卒業後の一九三九年に田島洋行に就職し、中国の漢口支店に勤めた。一九四二年、徴兵検査を受け甲種合格し、田島洋行を退社し、一九四四年一月、久留米の第一予備士官学校に入校、九月に陸軍中野学校二俣分校で学び、一二月、フィリピン戦線に派遣される。このとき、レイテ島はすでに米軍に占領され、ルソン島も米軍上陸間近という状況にあり、見習士官であった小野田は、ただちにルバング島で遊撃戦指導にあたるようにとの命令を受ける。

小野田の任務は、同島を米軍に占領された後も残置諜者として残り、ゲリラ戦を続けるという特殊なものであった。そのため、一九四五年一月には少尉に任官するも、私服姿で秘密戦を説く彼は、戦友から「野田醤油（小野田少尉を冷やかした言い方）は腰抜けで卑怯者」との陰口を叩かれたという。

同年二月にルバング島が米軍に占領されると、翌月に小野田は生き残った四十数人を分散して潜伏させ、ゲリラ戦を試みた。しかし、日本の降伏を悟った四一人はやがて投降。最後まで敗戦を信じなかった小野田は、島田庄一伍長、小塚金七一等兵、赤塚勇一等兵の四人でジャングルに潜伏し、住民や警察と衝突を繰り返した。しかし、一九四九年に赤塚が投降、一九五四年に島田が戦死、一九七二年に小塚が戦死すると、ついに一人になる。

一九七四年、ルバング島山中で日本からきた旅行者の鈴木紀夫と遭遇し、その後フィリピン空軍司令官に投降して、三〇年ぶりに日本に戻った。小野田の帰国も、横井同様にマスコミの注目を集め、一躍「時代の寵児」となった。

しかし、一九七五年には日本を離れて次兄のいるブラジルに渡り、小野田牧場を開拓しはじめ、翌年には損害保険会社代理店を経営する日本人女性と結婚。一九八四年、福島で小野田自然塾を発足させ、日本とブラジルを行き来する人生を送っている。二〇一二年六月現在も存命している、数少ない残留日本兵の一人だ。(小野田寛郎『わが回想のルバング島』)

・中村輝夫

「中村輝夫」は日本に帰りたかった

一方で、小野田が発見されたのと同じ一九七四年の暮れに、インドネシアのモロタイ島で、全裸で発見された残留日本兵がいる。彼は発見当初こそ世間の注目を集めたが、台湾の高砂族であることが判明して台湾に帰還したあとは、主にサンケイ新聞が報道を継続したが、彼本人の人生に対する関心ということでは、わずかに佐藤愛子『スニヨンの一生』(一九八四年に文藝春秋より刊行)が流通しただけで、時間の経過とともに忘却されていった。

中村輝夫(一九二九年、台湾生まれ)は、高砂族の一つのアミ族の出身で、先住民名スニヨン、日本名を「中村輝夫」、後年「李光輝」という中国名を名乗った。台東の信義国民小学校で学び、成績優秀で野球や相撲に強かった一方、口数が少なく、短気な一面もあったという。二二歳のとき、台湾ではじまった陸軍特別志願兵制度に、われ先にと血書して応募した。一九四三年に出征し、翌年、川島威伸隊長率いる陸軍歩兵第二一連隊遊撃隊の一員としてモロタイ島に渡った。このときすでに戦局は風雲急を告げており、二カ月後には、米軍艦の艦砲射撃が始まる。日本軍上陸時、モロタイ島に派遣された高砂義勇兵は五〇〇人いたが、敗戦後の一九四五年一月には一七二人にまで減じていたという。

中村の残留については、米軍の監視兵に攻撃されたときにジャングルに入ったとか、ささいなことから正規の日本兵と喧嘩して、軽い怪我を負わせてしまい、姿を消したなど諸説ある。

以来、三〇年にわたりジャングルで生き延び、発見時には「日本はまだ負けておりません。自分は日本に帰りたい」といって日本政府関係者をあわてさせた(河崎眞澄『還ってきた台湾人日本兵』)。中村一等兵の発見は、当時日本でも報道され、日本へ帰国させようという運動も沸き起こった。しかし「元日本兵だが、日本人ではなかった」中村は、日本と台湾が一九七二年以降断交状態にあったことから、一九七五年に台湾の中華民国が発行した帰国証明書を携え、中華航空機でジャカルタからシンガポール、香港を経由して台湾へと戻る。

彼は中華民国政府にとって、「招かれざる客」であった。台湾を支配した蒋介石率いる中華民国政府にとって、旧日本兵はかつての「敵」なのであり、とても「天皇陛下万歳」などと言える雰囲気ではなかった。空港で彼を待っていたのは、野次馬と日本人記者、それに同じアミ族の妻子であった。しかもこのとき、妻はすでに再婚しており、中村をひどく落胆させた。

その後、妻とは再婚するが、晩年は中毒に近い形で飲酒と喫煙を繰り返し、第二の人生の方途を見つけられぬまま、結核と肝臓障害を患い、肺癌となって一九七九年に死去した。

(丸川哲史「劉連仁・横井庄一・「中村輝夫」についての戦争」)

・藤田松吉 置き去り

翌年、藤田は、インド国境のフーコンでの戦闘に備えて編成された第一八師団(四〇〇〇人)第五五連隊に配属され、インパール作戦支援のため、八個師団一〇万人を前に奮闘した。しかし肝心の作戦が失敗すると、連合軍の迂回を阻止するのが任務であった藤田らは包囲され、最後は第五三師団の救援を受けて脱出することになる。このときの戦死者約三二〇〇人、負傷者は一八〇〇人におよび、藤田もまた塹壕から這い上がったところを迫撃砲弾の破片が左足を貫通する怪我を負った。

そこからが地獄だった。フーコンからタイまでの悲惨な敗走劇が始まった。戦闘と退却の

連続で疲弊した兵たちは、道端に力尽き、傷口の蛆虫（うじむし）を食らう者までいた。藤田も蛆虫が湧く足で、途中阿片を売って食料を得るなどしながら、何とかカーサの駅まで辿り着いた。しかし、列車は負傷兵で溢れ、藤田は乗車できなかった。一九四五年三月、ようやくチェンマイの司令部に戻り、そこでバンビアンの輸送部隊から物資をクンユアムの野戦病院まで運ぶよう指示を受ける。ところが、藤田が輸送をはじめて三回目、クンユアムがもぬけの殻となり、輸送部隊の方も撤退してしまっていた。藤田がタイ人の人夫とともにチェンマイの警察署長のところに駆け込むと、バンビアンの村落に残るよう言われ、指示に従った。

やがてすぐに日本軍が迎えにくると思っていたが、一年経っても伝令一つなく、長崎の家族に手紙を出したが返事がなかった。（三留理男『望郷』、青沼陽一郎『帰還せず』、将口泰浩『未帰還兵』、松林要樹『ぼくと「未帰還兵」との2年8ヶ月』）

・松本千代男

松本千代男（一九二三年、佐賀県生まれ）もまた満蒙開拓青少年義勇軍の一員として、一九三八年、一五歳で満洲に渡った。一九四五年のソ連参戦後、関東軍に見放され、ソ連軍の捕虜になってしまう。翌年三月、八路軍が進駐してきて、八路軍の管轄下に置かれると、北安に移され、そこで八路軍幹部から協力を要請される。松本は力仕事に従事した。九月はじめに帰国列車に乗るも、向かった先は、鶴崗炭鉱だった。その後、五年余にわたり、松本は何度も落盤を経験するなど、鉱夫として危険な労働に従事することになる。（古川万太郎『中国残留日本兵の記録』、NHK「留用された日本人」取材班『「留用」された日本人』）

・ベトナム

祖国統一のための長い闘い

一〇〇〇年以上にわたる中国支配を打破したものの、一九世紀末から二〇世紀初頭に進出してきたフランスによる植民地統治を受けていたベトナムにとって、アジア・太平洋戦争とは、その後に続く祖国統一のための長い戦いの第一段階に過ぎなかった。反日闘争は、やがて反仏闘争となり、さらに反米闘争へと発展していった。したがって、ベトナム人にとって、戦争の時代は実質的に三五年間続いていたことになる。

しかしその結果として、史上最大の局地国際戦争であるといわれるベトナム戦争、それがカンボジアに波及した第二次インドシナ戦争、さらにベトナム・カンボジア戦争に中国が絡んだ第三次インドシナ戦争やポル・ポト政権による大量虐殺に関心が偏り、それ以前の対仏闘争への関心は希薄となった。また物理的にも、一九八〇年代までは日越関係が敵対的であったこともあり、インドシナの残留日本兵について研究するのは困難であった。

1978年 中国軍がベトナムに侵攻